

学会の性格上、人口に間接的に関連する報告は少なくなかったが、より直接的に関係するものは以下のセッションの2報告のみであった。

#### セッションB - 2 「環境政策の国際比較 (その2)」

座長：仲上健一 (立命館大学)

討論者：飯島伸子 (東京都立大学)、野上裕生 (日本貿易振興会アジア経済研究所)、原嶋洋平 (拓殖大学)

##### 4 ベトナムにおける持続可能な都市化と宗教

報告者：小島 宏 (国立社会保障・人口問題研究所)、DANG Nguyen Anh (Institute of Sociology, Vietnam)

##### 6 フィリピンにおける都市貧困層と環境資源管理制度 パシグ川流域住民の実態調査を中心に

報告者：新見道子 (東京大学)、藤堂史明 (新潟大学)

2001年大会は植田和弘・京都大学教授を中心に再び京都市で行われることになっており、地の利を得て盛会になることが期待される。 (小島 宏記)

## アルゼンチンにおける人口統計プロジェクト短期専門家派遣報告

日本の国際協力事業団 (JICA) は、2000年に予定されていたアルゼンチンの人口センサスの準備に協力するために、1995-2000年の5年間にわたる技術協力プロジェクト (JICA 医療協力部の所管) を結んだ。日本では、これまで総務庁統計局が中心となってこのプロジェクトに協力してきたが、本研究所も専門家派遣、研修生受入れの形で協力してきた。このたび、本プロジェクトの終了に際して、現地プロジェクト・チーム (リーダーは藤田峯三氏)、JICA 事務所、アルゼンチン中央統計局 (INDEC) が協力して、特別セミナーが開催されることになり、2000年7月30日 (日) ~ 8月13日 (日) 日本からも特別講師として、筆者、廣松毅東京大学教授、福井弘道慶應義塾大学助教授、笹井誉行総務庁統計局統計情報課長が派遣された。

セミナーでは、日本側から藤田リーダーによる「人口統計プロジェクト5年間の歩み」というプロジェクトの総括報告、筆者から「世界の人口状況 - 南北間のコントラスト」、廣松教授から「情報通信革命と統計調査」、福井助教授から「統計 GIS の活用ポイント - 今後の GIS の展開」、笹井課長から「2000年国勢調査の準備状況とその利用」の各報告が行なわれた。その他に INDEC、州統計局、周辺国 (パラグアイ、ブラジル) からの報告もあり、活発な討論を含めて、セミナーは成功裡に終了した。

セミナー終了後、本プロジェクトのモデル州となっているイグアス州、テュブット州の2州とセンサス実施に熱心に取り組むコリエンテス州の州知事と州統計局を訪問し、技術協力の成果を視察するとともに、意見交換を行なった。

筆者は、セミナーでは、アルゼンチンが中進国的立場にあることを考慮し、先進国と途上国の人口問題の両方を対比させつつ、共通の論点をひき出すという意図で報告した。セミナー会場では途上国の家族計画プログラムの進め方につき質問を受ける一方、INDEC では局長から日本の高齢化状況と社会保障の対応について質問を受けるなど、予想通り、対照的な視点からの論議ができて有益であった。

アルゼンチンは、人口密度は日本で言えば奈良時代に相当し、しかも移民の国であり、地方分権の傾向が強い。このように、人口センサスを円滑に実施し、人口統計の完全性・正確性を高水準に確保

するための基礎的条件は日本とは大きく異なる。それゆえアルゼンチンの場合、中央と各州との連携・協力の努力、各州自体の調査実施意欲と実施能力の強化が、日本以上に必要と考えられる。その意味で本プロジェクトが、中央政府の INDEC と同時に、24州中5つのモデル州を選定し、それに対して技術協力を行ったことは、極めて適切なアプローチであった。

今回のセミナー、地方視察において、本プロジェクトが研修、機材供与を通じて、中央と州との連携強化の促進、モデル州の調査能力の向上に貢献した様子を見聞できたのは大変有意義であった。特にチュブット州において、センサスの調査区設定業務に新しい GIS の手法が取り入れられ、JICA 供与の機材が十二分に活用されていた点に感銘を受けた。(なおアルゼンチンの人口センサスは、予算上の制約から2001年に延期された) (阿藤 誠記)

## 第29回国際地理学会議

第29回国際地理学会議 (International Geographical Congress) が2000年8月14日から18日にかけて、韓国ソウル市の総合貿易展示場 (COEX) において開催された。同会議は国際地理学連合 (International Geographical Union) によって運営される国際学術大会であり、全体会議は4年ごとに開催される。今回は“Living with Diversity”をメインテーマに5つのシンポジウム、6つの特別発表が行われ、また一般発表のセッションは250近くにのぼり、約800件の口頭発表が行われた。このうち人口学関連の発表は「人口転換と人口変化」「エスニシティと環境」「人口と環境」「人口移動と環境」「ツーリズムと人口移動」等のセッションにおいて行われたが、セッション名からも想起されるように、気候変化と人口分布変動、都市化と災害、移民流入と地域社会の変容などというように、自然環境、社会経済状況の変化と人口変動との相互作用を論ずる研究が目立った。また地理情報システム (GIS) 関連のセッションにおいても、人口関連データへの応用例が多数報告されており、近年におけるソフトウェアの急速な機能強化、操作性の向上の中で今後一層の研究の活発化が予感された。

余談になるが期間中、大会の2ヶ月前に行われた史上初の南北首脳会談の結果を受けた離散家族の再会行事が同じ COEX を会場に行われており、統一の道筋、統一後の国家ビジョンを論じるシンポジウム、非武装地帯を巡るエクスカッション等が催されたこととあいまって、終始南北融和ムードに包まれた大会となった。(江崎雄治記)

## 第6回アジア性科学学会

アジア性科学学会 (Asian Congress of Sexology) は性科学に関心をもつアジア諸国の学会・団体等で組織されたアジア性科学連合 (Asian Federation of Sexology) により隔年開催されているもので、第6回の今年は8月18日～21日に神戸国際会議場で開催され、15ヶ国から650名が参加した。

開会式に続く会長講演では松本清一大会会長 (日本家族計画協会会長) が“Sexuality 2000 in a Changing Asia”と題して講演し、20世紀が人口爆発、都市化、少産化、晩婚化、高齢化の時代であったことを踏まえ、今日的課題として思春期保健の重要性を訴えた。

特別講演(1)は韓国の Choi 教授による“Ejaculatory Disorders (射精障害)”で、わが国でも昨年のバイグラ発売を機に勃起障害 (ED) をはじめとする男性の性機能障害への関心が高まっており、本大会で日本大学医学部泌尿器科の滝本教授によって報告された、30歳以上既婚男性の約3割が ED を抱えているという全国調査結果は新聞各紙でも取り上げられた。また特別講演(2)は波平恵美子お茶の